発達性トラウマ症の臨床

杉山登志郎著

金剛出版，A5判192頁，3,520円，2024年6月刊

（福井大学子どものこころの発達研究センター）**友田明美**

本書の著者は日本を代表する児童精神医学の専門家であり，特に神経発達症（発達障害）やトラウマに関する研究で知られている。著者の業績は，マルトリートメント（子ども虐待）や発達障害の理解を深め，治療と支援の枠組み形成に重要な役割を果たしてきた。著者は長年にわたり発達障害児やトラウマを抱える子どもたちとその家族の臨床に携わり，特に「発達性トラウマ症」や「複雑性PTSD」に焦点を当てた治療アプローチで知られている。著者はまた，DSMの限界を指摘し，新たな理解を求める姿勢を貫いている。著者がこれまで執筆した数多くの著書，中でも『発達障害のいま』（講談社，2011）や『子ども虐待という第四の発達障害』（学研，2007）は，日本における発達障害とトラウマの理解を深める重要なリソースとなっている。著者の臨床と研究は国内外で高く評価され，その影響力は大きい。

本書には大きく二つのテーマがある。一つ目は，マルトリートメントによって引き起こされる発達性トラウマ症や複雑性PTSDを持つ親子に対する家族併行治療の実践報告である。本書に紹介されている著者が開発したTSプロトコール（杉山・他，2022；Wakusawa et al, 2023）は，EMDRから派生したボトム・アップのトラウマ処理技法を用いた治療である。重度なトラウマの臨床では，通常の精神科臨床とは異なる展開や特有の要素が多く見られるが，これらの症例はしばしばさまざまな精神疾患の診断基準を満たし，誤診が頻繁に起こることがある。この領域の治療はまだ未開拓の部分が多く，臨床の現場で苦闘している方々にとって，このTSプロトコールや自我状態療法は参考になる部分が多いのではないだろうか。

二つ目のテーマは，精神科診断における混乱についてである。現在，DSMに代表されるカテゴリー診断が主流となる中で，その弊害が特に子どもの神経発達症を扱う臨床現場で顕著に表れている。精神科の診断が現実とは異なる方向に進み，結果として精神科臨床だけでなく教育現場にも混乱をもたらしている。特にトラウマ臨床において，この診断の問題は深刻である。神経発達症と診断されたものの，治療が効果を示さない事例が多々見られるからである。こうした頻回性のトラウマによるケースでは，まず「トラウマ処理」を最優先に考えることが重要である。著者は，フラッシュバックの治療を行うことが問題の本質を理解するうえで不可欠であると主張している。

著者の最新書である本書は，臨床家の皆様にぜひお薦めしたい一冊である。著者の深い知識と情熱が詰まった本書は，数多くの示唆を提供し，臨床実践において貴重なガイドとなることであろう。

強迫症治療マニュアル

エクスポージャーと反応（儀式）防止法：治療者用ガイドとワークブック

エドナ・B・フォア，
エルナ・ヤーディン，
トレイシー・K・リッチナー著
松永寿人，中尾智博，金　吉晴監訳
小林由季，小池颯希，中野稚子翻訳協力

金剛出版，B5判200頁，4,180円，2024年6月刊

（筑後吉井こころホスピタル）**飯倉康郎**

私は，1990年代半ばにFoa先生のところでOCDの研修を受けていた。その関係で私に本書の書評の依頼が来たようである。その頃の治療は，約1カ月間，患者に平日毎日外来に来てもらう曝露反応妨害法の集中治療であり，とてもよい治療成績をあげていた。

本書のオリジナルが出版されたのは2012年であり，私の留学の約20年後になるが，今回その翻訳版を読んでみた感想について述べていきたい。

Foa先生の曝露反応妨害法（以下ERP）は元来アグレッシブで，避けているものや状況へ徹底的に直面させることが特徴といえる。本書におけるERPに関する説明は以前とほとんど変わっていない。また，Foa先生独特の想像エクスポージャー（強迫症状に関

2026/09/23 15:28:36